

平成 30 年 5 月 8 日現在

機関番号：34304

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16478

研究課題名(和文) エンデュランススポーツにおける消尽と歓待に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study of Expenditure and Hospitality in Endurance Sports

研究代表者

浜田 雄介 (HAMADA, Yusuke)

京都産業大学・現代社会学部・講師

研究者番号：30612626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：近年、トライアスロンやマラソンのようなエンデュランススポーツは多くの人々に親しまれている。その理由に関して、おもにこれまでの議論では、エンデュランススポーツは長距離、長時間にわたる苦痛の対価として意味ある成果を得る有用性にもとづいた実践だと考えられてきた。対して本研究では、何の見返りも求めずただ力を使い果たそうとする消尽と、それを受け入れ支えようとする歓待という有用性から外れた体験に、エンデュランススポーツの魅力を見出した。トライアスリートを対象としたビデオ撮影やインタビューなどの調査によって、非日常的な生の実感としての消尽と歓待の様相が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In recent years, endurance sports such as triathlon and marathon have been enjoyed all over the world. Previous studies mainly discussed that endurance sports provide meaningful outcomes for people in compensation for an extended period of time and distance of suffering. Such utility of endurance sports is positioned to explain the reason why many people voluntarily put it into painful practice. This study further found another motive of people for endurance sports by focusing on their experiences without utility. In other words, the people experienced profitless expenditure by just exhausting their own energy and hospitality such as accepting and cheering for their own expenditure. The analysis of the data from video recording and interviewing of triathletes revealed an aspect of expenditure and hospitality in triathlon as specific experiences with a sense of extraordinary life.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：トライアスロン 体験

## 1. 研究開始当初の背景

エンデュランススポーツとは、トライアスロンやマラソンのような長時間、長距離にわたる苦痛を特徴とする競技の総称である。最初の世界的なランニングブームが起こった1970年代以降、「なぜ多くの人々が苦痛の実践に向かうのか」を問うた先行研究において、エンデュランススポーツは社会状況を反映した事象としてみなされてきた。近年、マラソンやトライアスロンは市民レベルで大きな盛り上がりを見せており、現代社会の動態を捉えるうえでも、エンデュランススポーツを対象とした研究の重要性は高いと考えられる。

そのなかで、報告者は広島県西部のトライアスリートを対象とした調査研究を行ってきた。一連の研究から見出されたのは、「自分との闘い」とも称されるトライアスロンにおいて互いの実践を支え合う「仲間」関係、そして「仲間」の頑張りに触発される、「仲間」からの応援を受けて苦しくとも脚が前に出るといった、トライアスロンの他者に突き動かされる体験だった。報告者の研究は、再帰的な個我の実践と考えられてきたエンデュランススポーツにおける他者性を論じた成果として位置づけられる。

亀山佳明による日本スポーツ社会学会大会での報告(2013)は、本研究を開始する直接の契機となった。亀山によれば、何らかの目的に向けた手段としての「有用性」から理解されてきた近代スポーツは、昨今別の様相を見せ始めている。それが見返りを求めずただ自らの力を使い果たそうとする消尽と、消尽を受け入れ支えようとする歓待の関係である。このようなただ与え合う関係のなかで、人々は後期近代において失われつつある活力ある生を実感しており、その象徴的なモデルがエンデュランススポーツであると亀山は指摘した。

概して、本研究に先行する議論の多くは、例えば達成感や自己肯定感のような苦痛の対価としての成果を得るため、つまり近代的な「有用性」にもとづいた実践としてエンデュランススポーツを理解してきた。しかしながら、前述の他者性に亀山の議論を重ね合わせると、エンデュランススポーツには「有用性」とは異なる論理が働いていることが推察された。消尽と歓待の関係からエンデュランススポーツを捉え直す試みは、「なぜ多くの人々が苦痛の実践に向かうのか」という問いについて考えるうえで重要な示唆をもたらす。しかしながら、そのような実証的研究はこれまでまったく行なわれていなかった。

## 2. 研究の目的

### (1)エンデュランススポーツにおいて消尽と歓待が生じる論理

事前の研究によって、エンデュランススポーツには成果への期待が忘却され、ただ自ら

を苦痛に投げ出す消尽の状態が存在していること、また選手への応援や支援が、消尽に共振して引き起こされる歓待としてみなされることが、大まかではあるが確認されていた。そこで本研究では、なぜエンデュランススポーツにおいて消尽と歓待の関係が特徴的に生じるのかを説明できる論理を明らかにすることを第一の目的とした。特にバタイユの議論をもとに消尽と歓待の概念を精査し、エンデュランススポーツを社会的に研究するための新たな分析枠組みを構築することを目指した。

### (2)エンデュランススポーツにおいて生じる消尽と歓待の実証

エンデュランススポーツの最中に消尽と歓待がどのように現出しているのか、またそれらが人々にとってどのような体験として実感されているのかを検証することが、本研究の第二の目的だった。これまでの研究のなかで報告者が目にした場面として、上り坂を必死に進む「仲間」の選手を応援するうちに、応援者が思わず後を追って走り出すということがあった。この場面は、消尽する選手とそれに引き込まれた応援者が一体になった歓待の関係としてみなすことができる。トライアスリートが体験していると思われる消尽と歓待の具体相を捉えるために、本研究ではトライアスロンを事例としたフィールドワークを実施した。

## 3. 研究の方法

「2. 研究の目的」の(1)に関して、特にバタイユの著作およびバタイユについて論じた文献を渉猟し、それらの要点を整理した。また(2)に関して、トライアスロン大会での実地調査、トライアスリートへのインタビュー調査、国内のトライアスロン専門誌記事などの資料収集を行った。

実地調査では、消尽と歓待がどのような形で生じるのかを動的に記録するために、大会の様子をデジタルビデオカメラで撮影した。蓄積されたデータについては場面ごとにフィールドノートを作成し、文献研究によって得られた知見と随時照らし合わせた。またこの映像データは、インタビュー調査において対象者に提示するための資料としても活用した。

インタビュー調査では、実地調査を行った大会に参加していた選手と応援者を主たる対象とした。この調査ではトライアスロンの魅力や生活上の位置づけなどについて問う半構造化インタビューに加えて、競技中の映像や画像を対象者に提示し、そのときの状態や感覚を振り返って表現してもらうという手法を取り入れた。これには通常の聞き取りだけでは得ることが難しいと考えられる消尽と歓待の感覚に可能な限り近い語りを、対象者から引き出すねらいがあった。

#### 4. 研究成果

(1) 「2. 研究の目的」の(1)に関する成果  
本研究では、「有用性」とそれによらない世界観としてバタイユが対置する「俗」と「聖」を、エンデュランススポーツ研究の新たな分析枠組みの基礎として援用した。「俗」とは労働に代表されるある目的に従った手段としての活動によって、個人がその生を維持する世界のことである。しかしバタイユにとって、そのような個人の生とは、「有用性」に隷従したものであるという点で十全ではない。そこでバタイユは、「有用性」に囚われることなく生きる「聖」の世界を示そうとする。

先にも述べたように、苦痛を伴う長い道のりの先に成果が期待されている点で、エンデュランススポーツは「俗」の世界の活動だといえる。選手は苦痛に耐えることはもとより、ペース配分や心拍数の管理、定期的な水分と栄養の補給、効率性を求めた機材の使用などによって、限界と対峙しながらもその内に留まるよう自分をコントロールし続けなければならない。

しかしながら、バタイユによれば苦痛は理性の弱さを露呈させ、自分をコントロールすることを不可能にさせる。つまりエンデュランススポーツとは、自分が破壊されてしまう力の働きの中かで自分をコントロールしようとする競技なのである。自分が破壊されることによって、個人はその生を維持する「有用性」から外れた弱い存在になってしまう。ただしそれは単に弱いのではなく、「有用性」に従っていない点で逆説的に完全に自律してもいる。このような生の様態を、バタイユは「聖」の世界における「至高性」と呼んだ。

上記のことから導き出されたのが、エンデュランススポーツにおける相反する力の二重性である(図1)。円内は、選手が長時間の苦痛を介して競技中に身を置くことになる領域を表している。そのなかで、選手は自分を限界のうちに留めてコントロールしようとする「俗」の力と、限界を超えてコントロール不能になるまで自分が破壊される「聖」の力のあいだで揺らぐ存在となる。消尽とは、この揺らぎのうちに自分が破壊され、「有用性」から外れた選手のありようとして考えることができる。

消尽と歓待がただ与え合う関係であることに立ち返ると、「有用性」によらない存在として生きる時間(「瞬間」)において贈与がなされるとバタイユは論じている。選手と応援者の場合であれば、自他を隔てる個人の限界を超えた「瞬間」に溢れ出した選手の力が応援者にもたらされ(贈与され)ともに消尽する連続した存在となる。この「有用性」から外れた消尽としての応援が歓待であり、選手もまた応援者からの力の贈与を受ける。このような溢れる力を贈与する体験に、亀山のいう活力ある生の実感との一致が認められる。

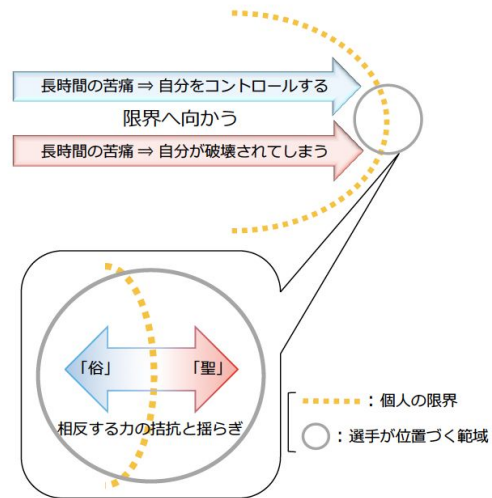


図1: エンデュランススポーツの二重性

繰り返して確認すると、本研究の「2. 研究の目的」の(1)に関する成果の要点は、エンデュランススポーツの二重性という図式の発見にある。この図式によって、エンデュランススポーツにおいて消尽と歓待の関係が特徴的に生じることに対する一定の説明が与えられた。

#### (2) 「2. 研究の目的」の(2)に関する成果

本研究が調査対象としたトライアスロン大会のうち、「全日本トライアスロン皆生大会」(「皆生」)は、日本のトライアスロン発祥の「聖地」として、また国内では数少ないロングディスタンスという最長距離のカテゴリーに区分される大会として、高い人気を誇っている。種目ごとの距離設定はスイム(水泳)3km、バイク(自転車)140km、ラン(マラソン)42.195kmで、総合の制限時間は14時間30分とされている(いずれも第37回大会時点)。7月の連休中日に開催される同大会には「灼熱の皆生」という異名があり、大山山麓道路を含むバイクコースの厳しさでも知られている。ここでは、「皆生」のラン後半からフィニッシュ地点にかけての場面とを、消尽と歓待の具体相を示す例として取り上げることにする。

#### ランコースのエイドステーション

ランコースの26.2km地点に設けられたエイドステーション(競技中に選手が補給や処置を受けることのできる場所)に、重い足取りで歩き、テーブルにもたれかかって身体を支えるほどに消耗した選手の姿がみえる。やがてその選手がテントの脇に据えられた大きなバケツの前で身体を屈めると、すぐにその頭上から、ボランティアスタッフの中学生が多量の水を含んだスポンジを絞る。水を滴らせながら、明るさに満ちた表情で、選手と中学生が顔を見合わせる。選手はしっかりと頷いてから身体を起こすと、まるで力を取り戻したかのように走り出した。

競技中の破壊の進んだ状態に関して、「皆生」での年代別入賞の経験を有するある選手は「へろへろとしかいいようがない」と振り返る。加えて「へろへろ」の状態とは、欲するままに補給を摂ったり水をかけてもらおうと身をさらしたりする「動物的」なものであるとも述べている。バタイユによる「有用性」のうちに生きる人間とそうではない動物の対比に鑑みると、「動物的」とは図1に示した揺らぎのなかで選手が「有用性」から外れた消尽する存在となっていることを表している。

一方で、大会公式のエイドステーションとは別に、選手への応援とともに飲食物や体を冷やすための氷などを提供する「私設エイド」で活動していたある応援者は、「(選手は)しんどい思いしとるけど前に進もうとして、その姿を見たら応援せにやいけんなんて思う、そこにはパワーもらいますよね」と語っている。この応援者と上記の中学生は、選手を前にしての否応のなさという点で共通している。この否応のなさは、「有用性」から外れて消尽する選手と連続した存在となった「瞬間」としてみなされる。そしてこのように考えるならば、「パワーもらいますよね」という語りや中学生と選手の明るさに満ちた表情、足元のおぼつかなかった選手が再び走り出したことに、消尽と歓待の関係を特徴づける溢れる力の贈与、活力ある生の実感を見出すことができる。

#### 競技終了直前のフィニッシュ地点

2015年7月19日午後9時28分、第35回「皆生」はスタートから14時間30分が経過しようとしていた。そのとき、フィニッシュ地点である陸上競技場にひとりの選手が帰ってきた。するとフィニッシュゲートの周りには応援者、ボランティアスタッフ、競技を終えた選手が集まり始め、それらはやがて大きな声援と拍手、踊躍が混じり合った渦となる。その渦に引き込まれるかのように、最後の直線に入った選手の走りは勢いを増していく。制限時間のわずかに3秒前に両手を上げてフィニッシュゲートを駆け抜けた選手は、急に失速してその場に立ち止まると、幾許かのあいだ両手を膝についてうつむいたのちに、鳴り止まない拍手に向けて何度も深く頭を下げるのだった。

「渦」という語をあてたことに関して、人間の生は「どうか安定している渦巻のようなもの」だとするバタイユの一節がある。渦巻く生の力は人間の内部でのみ流れるのではなく、時として外部へも流れ出し、また流れ出たほかの生の力が内部に入り込んでくることもある。バタイユにもとづけば、フィニッシュゲートで人々が体験したのは、選手の消尽を機に自他を隔てる限界が消失し、流れ出た生の力がぶつかりあって大きな渦となるような体験だったと考えられる。

調査を進めるなかで、「皆生」がエンデュ

ランススポーツにおいて消尽と歓待が生じる条件について考えるうえで重要な事例であることが明らかになった。先に触れた「私設エイド」のような選手への非公式の支援は、考え方によっては大会の適切な管理運営や競技の公正性を揺るがしかねない存在である。しかし「皆生」では特定の選手に限った支援の禁止などと呼ばれつつ、「私設エイド」を黙認している。このような「皆生」の近代スポーツとしての不徹底さ、競技とその外部の境界の曖昧さは非常に示唆的な知見であり、2018年度中に論文を公表する予定にしている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

1) 浜田雄介, 「トライアスロンは近代スポーツなのか?」, 日本スポーツ社会学会第27回大会学生企画シンポジウム「近代スポーツの果て、あるいはその先を問う」, 2018年3月17日, 順天堂大学(東京都・文京区).

2) 浜田雄介, 「エンデュランススポーツにみる統合と生成の論理」, 西日本スポーツ社会学会第23回大会, 2017年9月4日, 四国三郎の郷(徳島県・美馬市).

3) 浜田雄介, 「トライアスロン大会における消尽と歓待の様相」, 西日本スポーツ社会学会第22回大会, 2016年8月28日, 四国三郎の郷(徳島県・美馬市).

4) 浜田雄介, 「エンデュランススポーツの特性としての「禁止」/「侵犯」」, 日本スポーツ社会学会2015年度第1回関西学生フォーラム, 2015年7月25日, 龍谷大学(京都府・京都市).

[図書](計1件)

1) 浜田雄介, 文眞堂, 2017, 「純粹贈与としてのエンデュランススポーツ」, 広島市立大学 際 研究フォーラム編, 『際 からの探求 つながりへの途』, 210-221.

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

浜田 雄介 (HAMADA, Yusuke)  
京都産業大学・現代社会学部・講師  
研究者番号: 30612626